

大川小学校の悲劇

経営情報学部3年 鈴木 舜基

飯田ゼミでは今年3月の合宿として大川小学校の被災現場に行ってきた。大川小学校の映像はテレビで何度もみたが、実際に行ってみると自分の想像を遥かに超えた惨状であった。まず、真っ先に目に飛び込んできたのは、倒壊した校舎である。太い石柱はすべて折れまがり、校舎全体が砂にまみれた、がらんどう状態であった。大川小学校という瓦礫に近い校舎は、東日本大震災という出来事を象徴していた。訪問した日は、偶然にも気温が低いことに加えて、上着を突き抜けるほどの強風が吹いていた。震災当時の雪降る過酷な天候状況が理解できた。テレビでは「なぜ裏山に逃げなかった」のかという批判がかなりあるが、実際、自分がその山の麓にたつとかなりの急斜面であり、危機的状況のさなか、小学生全員、安全な小高い場所まで登れるのだろうかという疑問を持った。この点で、私は強い余震も続く校庭で待機させた教員も相当迷っていたのではないかと思っている。結果的に教員・児童あわせて80名以上が亡くなってしまったが、教員が精一杯、児童を守ろうとする気持ちが伝わってきた。この大川小学校の悲劇は、検証委員会が立ち上げられているが、まだ結論はでていない。しかし、実際、悲劇の場所にたつて、テレビから流れる報道と自分の目でみた現場のギャップは頭の中にこびりついている。



緊張と悲しみの中の焼香

鎮魂の場所で考えたこと

経営情報学部3年 小俣 歩夢

私たち、飯田ゼミは、東日本大震災が起きてから2年目にあたる今年の3月11日、大川小学校の跡地を訪れました。仙台駅から約1時間半、貸し切バスに揺られながら、軽い気持ちで、復興の現場を見に行くのだろと思っていました。しかし、その被災現場に着くと、あまりに悲惨な状況で、現実感がなくなってしまいました。建物の跡地には立ち入り禁止の看板がたくさんあり、子供を亡くしたとみられる親御さんたちが涙しながら、線香の煙が渦巻く中、ボロボロの校舎に向かって喋りかけていました。現地の方にもお話を聞くことができ、津波の避難場所も案内してくれました。標高3メートルくらいだそうで、津波からは逃れられないくらい低さでした。校舎付近には重機がたくさんあり、いまだ行方不明の児童を探しているのだそうです。多くの人々が自分たちに向かって、この3月11日の、この時間(2時46分)を選んできてくれてありがとうと言ってくれました。私は、この言葉の意味を「被災した日を忘れないでほしい」と思っています。このような悲劇にもかわらず、凍つくような寒さの中で、温かい飲み物を差し出してくれた現地の人々の優しい対応に涙がでそうになりました。帰りのバスの中では、単なる復興のための旅行と考えていた自分に腹が立ちました。



寒風の中で頂いた紅茶で一息

SGSでの挑戦

SGSでの4年間を通して、物事に対する考え方が変わった。何事にも積極的にチャレンジすることの大切さ、不可能なことも努力をすれば可能にできるということを学んだ。以前より、精神的にタフになり何があっても前向きに最後まで諦めないでやり遂げられるようになったと実感している。

大学に入学するまで私は、英語が苦手だった。そんな私がSGSに入ってまず決めたことは「卒業までにTOEIC800点を取る」ということだった。その当時TOEICが400点だった私は簡単に手に入らない目標を立てることで自分を奮い立たせた。Academic English Program (AEP)の授業ではクラスメイトのほとんどが留学経験者ということで英語のレベルが高く、授業についていけないことが何度かあり、何度もくじけそうになった。しかし、そのような状況でも毎日TOEICの勉強だけは欠かさなかった。1年次の夏には大学の短期留学プログラムで5週間オーストラリアに行った。初めての留学、日本人は私だけという環境の中にかく積極的に様々な国の友人達やホストファミリーに話しかけ続けた。この経験で英語は楽しんで学ぶものだとすることを学んだ。この留学が終わったと同時に「絶対に



オーストラリア短期留学での仲間たち

グローバルスタディーズ学部4年 中西 治香

長期留学に行きたい。」と思い始めた。5週間で海外の雰囲気は学べたが、肝心な英語力はまだ十分ではなかったからだ。そして2年次の8月から8ヶ月間SGS提携校であるカナダのアルゴマ大学との交換留学プログラムに参加した。現地では大学の寮とホームステイを経験し、自立と異文化を学んだ。授業は心理学や地理学を専攻し、毎日予習復習をやり続けた。またスピーキング、リスニング力向上のために週4回以上8ヶ月間ジムに通い、ZUMBAやYOGAを通して現地の方々と交流した。

2度の留学でたくさんのことを学んだ。海外の文化はもろろんのこと、自国のことも改めて知ることができた。また海外での生活は日本での当たり前をいい意味で裏切ってくれた。帰国後に受けたTOEICでは入学時の目標の800点を超えることができた。

最後に、就職活動はとても楽しいものであった。選考で同じ学年の人たちや様々な企業の方々と話せること、すべてが初めての経験でとても充実していた。また就職活動において、常にマイペースを心がけてきた。自分にとって何が一番大切なのか、将来どのようなになりたいのかを明確に持つことが重要だということに気づけた。結果、第一志望である航空会社を含め3社から内定をいただくことができた。

SGSに入って私はとても成長することができた。成長できるかできないかは自らの心の持ちようなのであると考えている。



カナダ留学時のルームメイトと行ったニューヨーク

オーストラリア留学

経営情報学部 3年 石川 堅一

私はオーストラリアのケアンズに約6ヶ月間英語を勉強しに行きました。そこで私はいろいろなことを体験し、英語以外のことも多く学びました。

私が留学した学校はケアンズの中心地から少し離れたケワラビーチというところにある Sun Pacific College という語学学校で、この学校には韓国、台湾、フランスなど、様々な地域から来た広い年齢層の学生がいました。先生方もとても良い先生ばかりで、学生が授業に飽きないように工夫した授業を行ってくれます。おかげで私は楽しく英語を勉強できましたし、この学校のポリシーでもある、English only のルールも英語を勉強する私にはとても為になりました。

はじめはまったく喋れず、聞き取ることもできませんでした。授業で習う文法は理解できるのに、会話はできないという状況で、正直大変辛かったです。しかし、Sun Pacific College (SRC) で生活していくうちに徐々に話せるようになり、さらに会話ができるとほかの国の人も話すことができ、学校生活がより楽しくなってきました。休みの日には、韓国や、台湾国籍の友人と一緒に出かけようになったのですが、私は自分でもこの状況に驚きました。回りには日本人の友人が居ないのに、私は何の心配もなく楽しく休日をご過ごせるようになっていたからです。

また、この学校があるケワラビーチも英語の勉強をするにはとても良い環境でした。周りで遊べるところはビーチしかありませんから、放課後は宿題やその日の復習をする時間がたくさん取れました。

だからといって勉強ばかりしていたわけではありません。毎週金曜日にはビーチで、ほとんどの学生が参加する Graduation Party があります。私はこのパーティーが毎週の楽しみでした。そしてここでも英語を使って話すので、英語の勉強に大変役立ちました。また、SPC にはハロウィンやクリスマスパーティーなど文化や生活習慣を学ぶ様々なイベントがあります。これを考えてくれた先生やスタッフにはとても感謝しています。

ホームステイの家族もすばらしい家族で、私は約3ヶ月間お世話になりました。初めは文化の違いや、会話ができないなどの問題がたくさんありましたが、彼らはいつも私に優しく接してくれて、毎日仕事で疲れて帰ってくるのに寝る前に私の日記の文法をチェックしてくれたり、宿題を見てくれたりしました。休みの日には車でシティで行われる朝市やケアンズ動物園などいろいろなところに連れて行ってくれました。本当に感謝しています。学校で出来た友人とは今でも定期的に連絡を取り合っています。もちろん英語を使って。私はこの学校に留学できたことにとても満足しています。また、様々な面でサポートしてくれた家族、大学の先生、事務の方にも心から感謝しています。

私は今回の留学で自分の価値観はとても小さいということを知りました。留学に行く前は韓国についてあまり良い印象を持っていませんでした。それはニュースなどで韓国と日本が領土問題などで争っている場面を良く目にしていたからです。しかし実際の韓国の人はとても温かい人たちでした。韓国は日本以上に上下関係が厳しい国です。普段は同じ年の人間としか話さないという人がたくさんいましたが、留学先では一番年下の私と良く話してくれましたし、いっしょに遊びに行ったりもしてくれました。私は自分の狭い考え方をとても恥ずかしく思いました。そして、世界のことを、自分の思っていることが本当に正しいのかを、いつかまた海外に出て、自分で確認したいと思いました。



クラスメイトとともに卒業の喜びを分かち合う

留学で私が体験し得たモノ

経営情報学部 3年 大嶋 啓令

2012年9月24日から2013年3月9日までの間、イギリスのロンドンにある英語学校、Burlington School of English (バーリントン英語学校) に約半年間通った。幾つかのコースの中で私は Basic English (日常会話) を専攻した。かなり小規模な学校で、様々な国から来た学生たちがその学校に通っている中で、日本人は全体の1割にも満たない程だった。そこではただ英語だけを学ぶのではなく、色々な国籍の留学生たちとの交流もできた。様々なことを学んだが、自分の知らなかった国々の「率直な本音(ぶっちゃけ話)」が聞けたのが私の中では最も大きな経験だったと言えるかもしれない。

海外語学留学の大きな特徴として、日本での学習と全く異なっている点は、誰も日本語が話せないし通じないということにある。もちろん日本国内でも英語を英語で教えているところはあるかもしれないが、そんなものとは比較にならない程、授業への身の投げ方が変わる。それがそのまま英語力として身につけてくれれば何もいうことはないのだが、日本語でも100%理解できない文法などを英語で教わるのだ。当然のこと、理解できない所がどんどん湧いて出てくる。授業内で全てを理解することは無理そうだと考えた私は深く考えるのを止めることにした。ただし、その授業で自分が何をやっていて先生が何を言いたいのか、をほぼ理解しなければ授業を受けている意味がないため、気になる点やわからない所はすぐさま先生に質問するようにした。それでも引っ掛かりが残っている場合はそこでできた友人に聞いて回り、分からないまま置いておくのではなく、極力その場で理解していくようにした。そうした繰り返しを重ね、学校が終われば新聞を読み、ホストファミリーと夕食を取りながら毎日3時間近くおしゃべりをする。その際にはその日学んだ事をいきなり実践投入していった。

日本にいと英語は「教科」でしかない。あくまでも個人の能力を図るための1つの物差しに過ぎない。しかし、ちょっと海を越えれば、それは「言葉」に変わり、途端に必要性が生まれ、誰かと話すために最も広く知られている「英語」という広くお手頃感覚で使われるツールになる。当たり前のことだがなかなか実感の得難いこうした認識を、今回の留学で痛感することができた。これはできれば留学をしてからではなく、日本で英語教育を受けていたもっと前の段階で気付いておくべき点だったと思う。

留学は、自分の母国語ではなく、英語だけが唯一の対話手段となる環境に身を置くということ。通常ではない不安や困惑、ストレスが起きてから寝るまでべったり付きまとう。また、国によっては治安が多少不安定な場所もある。そうした様々なリスクの中での生活は、それを願ったとしてもほとんど経験できないものだろう。旅行などでもまず味わうことがないため、至高の価値があるとも言える。この経験は自分を間違いなく大きくしてくれたと私は確信している。

最後に、私はこの留学を通して掛け替えのないものを身につけることができたと思う。それは「度胸」である。1人で何かをすることは今までにも幾度となく経験してはいたが、それまで住んだことも行ったこともない、そして誰もが他人の土地で暮らすということへの不安や怯えはこれまでの比ではなかった。そんな暮らしに揉まれたおかげで、今では不安や怯えで出せなかった1歩が踏み出せるようになった。私が現在、ただ1つ誇れることは、留学したいという「思い」を少しも曲げることなく、実現させたことである。



カレッジの先生と日本人学生、そして韓国、ロシアからきた友人たちと一緒に人気のホットケーキ屋さんにて

ホストファミリーの両親、一緒にホームステイしているイランから来た学生とともに

〈プロジェクトゼミ〉

メディア実践論の制作現場から

生かされた者への想いと未来を伝えたい ～私の東日本大震災～

経営情報学部 2年 阿部 彩

この春休み、故郷宮城県石巻市に戻った。去年4月、大学進学で上京して以来一年ぶりの帰郷だ。東日本大震災の被災地である石巻では、がれきの片付けが急ピッチですすんでいた。しかし、更地ばかりがひろがる荒涼とした風景に、まるで別世界に迷い込んだような気分が襲われた。故郷で迎えた震災2年目の3月11日は、「あの日」と打って変わって明るい日差しが降り注ぐ穏やかな空が広がっていた。しかし、いまあのとときの記憶が鮮明によみがえる。故郷は懐かしいと感じながらも、切ない感情がこみ上げてくる。

あなたは、1日にいくつの選択をするだろうか。例えば進路、家族、恋愛。登下校で聞く音楽や明日のおかずといったものも小さいが選択の1つだろう。人は、毎日たくさんの「選択」の中で生きている。しかし、命に関わる「選択」というものはそう何度も直面するものではない。「3.11」での死者は約16000人、私の友人もその1人だ。彼女はまず他人の事を考える、優しさの中に強さを持った人だった。私はそんな彼女の優しさに何度も何度も助けられた。そんな彼女だからこそ「3.11」が起きた時もまず自分より家族の事を考えた。彼女が最期に選び取った「選択」は家族を救うことだった。

身体の自由の利かない人を、涙を飲んで置いて避難したという話は被災地には数え切れないほどある。私もしその立場だとしたらその選択にどう答えを出しただろう。置いていかれる人たちの、生きることでできる人への「生きてほしい」という想いが切ないほどわかる。しかし、彼女は最期の最期まで家族を救出しようとした。結果彼女は命を落としてしまったが、私は彼女が最期に選び取った「選択」を今でも誇りに思っている。彼女の強さと優しさはこの先生きていく中で絶対に忘れない。東日本大震災、それがどんなに悲しい記憶となったとしても、それがなければ今自分がここで毎日を生きていることはない。もし私があのとときの彼女の「選択」を否定してしまったら、それは彼女自身の生き方、彼女のすべてを否定していることになる。彼女だって自分の「選択」が間違っていたなんて思っていないだろう。

今私はプロジェクトゼミ「メディア実践論」でドキュメンタリー制作と取り組んでいる。ここに参加して一番伝えたいと思ったことは、「想い」と「未来」だった。震災被害の規模や現状を伝えることも、とても大切な。しかし、私は、「私の東日本大震災」をテーマに、生かされたものへの想いと未来を、私の制作するドキュメンタリー映像で大勢の人々に伝えたいと思う。

人生に間違った選択はない。それが、東日本大震災を越え、今ここにいる私の答えだ。

この先辛い事はたくさんあるだろうが、彼女のように自分が正しいと思う「選択」を選び取り、彼女の方まで精一杯強く生きて行こうと思う。故郷で撮ってきた素材映像の編集と取り組みながら、そんな思いが胸の奥にこみ上げる。



宮城県石巻市 2013年3月11日

Fun to Drive again

経営情報学部 3年 小形 希

2012年10月2日。夜明けとともに始まるイベントをめざし、深夜の高速道路を走っていた。イベントのロケ取材申し入れは断られていた。当然のことだったかもしれない。突如名も知らぬ学生が、ゼミのワークとして取材させてくれと、ただ熱意だけで頼み込んだのだから。打つ手が完全に消えたときは諦めることも考えた。だが、せめて現場の雰囲気だけでもと赴いたのだ。照明に照らされた小田原アリーナの駐車場。なんとすでにイベントの参加者が集まり始めているではないか。胸が熱くなった。「スポーツカーはカルチャー」である。そんなコンセプトで発売された新型スポーツカー「トヨタ・86」ユーザーのイベントがあと数時間で始まるようしていた。

世の中数多くある趣味の中で、車を愛する人たちはそう多くはない。今や移動手段として車を所有していることが当たり前という価値観の中に我々は暮らしている。だから車といえば、車内が広く、値段も手ごろ、維持の容易さが9割以上を占めるという現状だ。だがしかし、ここで聞きたい。移動や荷物運び、維持のし易さだけが車の価値だろうか。もっと根底にある、車をはじめて運転した時の感動、楽しさをもう忘れてしまっているのではないか。

車を「移動の手段」とするか「相棒」とするか、ここに生じる車に対する認識の差はそう小さくはない。そんな時代に、スポーツカーは運転する者すべてに運転する楽しさ、そこでの「夢の時間」というものを改めて教えてくれる。エンジンをかけ1m進めばそこにあるのは間違いのない非日常の空間であり、自分だけの特等席になる。厄介なのはこれを言葉で言い表せないということ、世間一般にはなかなか理解されないことだ。しかし、不思議なことに「こちら側」であれば言葉不要の空間が生まれる。

目指したイベントはトヨタ主催の「86S J001 HAKONE」。トヨタ86の初オーナーズミーティングであり、なんと箱根ターンパイクを1日中貸し切って開催されるスペシャルなイベントだった。そして、ロケ取材はできなくとも、イベントの現場に立って、そこで起きることを自分の眼で見ておきたいと駆けつけた私に、なんと現場で取材の許可が降りたのだ。切なる思いが通じた感激がイベントの華やかさを一層盛り上げることになった。マスメディアの取材クルーのテレビカメラとともに大学から借り出した小さなビデオカメラが並んだのだ。前代未聞の風景だっただろう。移動も取材クルーの一員として動くことになった。

この「トヨタ86」を軸に集った人々の群像を追ったビデオの編集作業は、現場での発見と感動、そして思いをもってぶつかれば道はひらけるという感激の追体験だった。それ以上に、私がこのビデオ制作のスタート時に抱いた、車はカルチャーだという思いをあらためて深くすることになった。時代は変わり、自動車産業とユーザーの意識もこれからきっと変わっていくのではないか、そんな期待を胸に抱いている。



「86」イベント

毎年6月に開催される『多摩大学ドッチボール大会』は、今年で8回目となります。多摩大学はゼミナールを中心とし、少人数制でじっくり学べる学校であるのが特徴です。今大会の目的は、そんな多摩大学の中心となる2年次以降のホームゼミナールや、1年次のプレゼミナール単位で参加して頂き、ドッチボールを通じて“ゼミ内の絆”や“他ゼミとの親睦”を深めることにあります。そして大会の運営事務局を務めるのが、酒井麻衣子ゼミです。酒井ゼミはマーケティング・データ分析を主に学んでいますが、社会に出て大人数を動かすようなプロジェクトをマネジメントする力をつけるため、事務局運営に取り組んでいます。ゼミ生は3学年・約50名おり、広報・会計・WEBを担当するリーダーと、全体統括するプロジェクトリーダーの計4人が中心となって、ゼミ生全体で運営します。

昨年度は、初回の運営会議において『1年生に参加してもらい、来年度以降の参加人数を増やそう!』という目標を掲げました。そのために必要な2つの戦略を立てました。

① 1年生の参加人数を増やす

まずは参加の動機づくりとして、1年生には参加賞のクオカードを贈与することにしました。一昨年は予算を1万円もオーバーしていたので、クオカードの予算を確保するのは簡単ではありませんでしたが、在庫チェックや参加者人数を徹底管理したことで、予算を捻出することができました。次に、WEBサイトにQ&Aのページを作成してこまめに更新し、参加を検討する学生の疑問点を解決できるよう努めました。ページの新設は骨の折れる作業でしたが、先輩にやり方を教わりながら、なんとかエントリー開始に間に合わせました。また、参加賞のクオカードが目立つようなポスターを作成し、エントリー締め切り直前にも再度プレゼミへ宣伝回りを行いました。その結果、1年生の参加チームが2つ増え、参加人数は約3倍になりました。

② 「あー楽しかった!」と記憶に残る大会にする

さて、次年度も参加してもらうには、どんな大会にしたらいいでしょうか。私たちは、例年の大会における問題点などを考慮しながら、“試合を盛り上げる”“途中帰宅者を減らす”“チームの絆を体感してもらう”の3本柱で考えました。まず、得失点を詳細に記録・公表することにしました。当日は少しスコアの計算に手間取ってしまい、試合の進行が遅れる要因になってしまいましたが、予選でも白熱した試合が行われ、多いに盛り上がりました。次に、予選で試合に負けてしまうと帰ってしまう途中帰宅者が多く、本戦でギャラリーが減ってしまうことが多かったため、“優勝チーム予想ゲーム”を同時に開催しました。ゲームへの参加率は低かったのですが、例年より最後まで残ってくれている人が多く、効果があったのではないかと思います。さらに、参加賞として、全チームにメンバーとの記念写真を人数分贈与しました。また大会終了後、サイトに特設ページを開設し、記念写真や大会の風景・舞台裏などをアップしました。この大会が、大学生生活の一つの思い出として残っていたらいいなあと思います。

このように、私たちはさまざまな戦略を考え、大会づくりに努めました。その結果、昨年は21チーム、約230人の学生が参加してくれました。学生の方や先生方にも「年々運営が進歩していて、今回はさらに楽しかったよ。」と、大変好評を頂きました。また、同日に開催されていたオープンキャンパスを訪れた高校生から、「とても雰囲気がよく、楽しそうに試合をしていたのが印象的だった」というメールを頂き、大変うれしく思いました。また私たちも、この大会を通してプロジェクトのマネジメントを学び、その後のゼミ活動や就職活動に活かすことができました。今年は後輩たちがリーダーとなって大会が運営されます。どんな大会になるのか、今から楽しみで仕方ありません。

第8回ドッチボール大会 結果報告

開催日時：2013年6月23日(日)

会場：多摩キャンパス アリーナ 参加チーム：16チーム

【プレゼミ】

プレゼミE「イイチーム」

【プロジェクトゼミ】

サンリオゼミ

「7月6日無料イベントチーム」

【ホームゼミ】

出原ゼミ「モヒデブス」

梅澤ゼミ「フツウメ」

梅澤ゼミ「ウメンジャー」

大森ゼミ「チーム☆大森」

大森ゼミ「アベンジャーズ」

酒井ゼミ「松本麻衣子」

酒井x下井ゼミ「菊池」

趙ゼミ「team 趙ゼミ」

趙ゼミ「チームイノベーション」

浜田ゼミ「Aチーム」

浜田ゼミ「チームB」

浜田ゼミ「チームC」

浜田ゼミ「Dチーム」

村山ゼミ「チームYAMADA」

■優勝

酒井x下井ゼミ「菊池」

■準優勝

趙ゼミ「チームイノベーション」

■第3位

村山ゼミ「チームYAMADA」

